

## 母子関係と語彙獲得

国際基督教大学 植村千勢子  
国際基督教大学 斎藤 哲  
お茶の水女子大学 藤永 保

### Mother-child relationship and vocabulary acquisition

International Christian University UEMURA, Chiseko  
International Christian University SAITO, Satoru  
Ochanomizu University FUJINAGA, Tamotsu

語彙の獲得は、従来、生成意味論などにみられるように、ほぼ純粋に認知的過程として考察されてきた。本論文は、母親と実験者が、それぞれ始語期の7人の幼児(1歳半から2歳)に未知の事物名称3語ずつを教えたとき、それらがどのように学習されていくかを3~4週間後にテストすることにより、母子関係という対人的要因が語彙獲得にどんな寄与を果しているかをみようとした。結果は、母親が教えた場合のほうが圧倒的に定着度の高いことを示した。

**【キー・ワード】** 母子関係, 語彙獲得, 相互交渉分析, 始語期

Vocabulary acquisition has been investigated as a genuine cognitive process such as in the generative semantics. This paper aims to clarify effects of mother-child relationship on vocabulary acquisition using an experimental teaching method. The subjects were 7 infants from 18 to 24 months old, beginning to use one or two-word sentences. Their mothers and two student experimenters taught them each 3 different new words. After 3 or 4 weeks, we took a test to see what words they could get. The results showed that they acquired the far more words their mothers taught than those the experimenters did.

**【Key Words】** Mother-child relationship, Vocabulary acquisition, Interaction analysis, First word period

### 問 題

言語獲得はいかになされるかは古くして新しい問題であるが、近年の研究動向は、チョムスキー(N. Chomsky)による生成文法学説の強い影響を受けて生得説の側に傾きつつあるのは周知のとおりである(藤永, 2001)。語彙の獲得は、言語の種別により同じ対象が全く別の名称によって呼ばれることがよくとり上げられているように、経験的要素に依存することはいうまでもない。しかし、この分

野ですら、かつてのチョムスキーらの生成意味論の主張にみるように（今井，1986），生得説的要素を強調する理論もある。たとえば、「花嫁」といった単語の意味は，男女，老若，既婚・未婚，新旧などの二項対立的な意味素性の組み合わせによって定まり，それらの基本的な二項対立的素性を順次習得していくことによって，より複雑な意味をもつ語彙が獲得されるとする。さらに，これらの二項対立の理解そのものは，生得的な理性的機構によって営まれる。チョムスキー派の理念によれば，生得的要因を強調することは，半ば必然的に理性的機構の役割を強調することにつながる。語彙獲得とは，本質的に認知的過程だとされるのである。

近年のチョムスキー理論は，文法（統辞法）の普遍性と生得性を強調し，その論理的形式性・超越性・独立性などの附随する特性を守るために，意味のように現実世界からの「汚染」を免れない対象を除外しようとする。したがって，現在は上のような主張はみられなくなった。しかし，現代言語学においても，マークマン（E. Markmann, 1992）の先天的制約説は，幼児があたかも非自覚的言語学者のごとく，先天的制約を活用しての一種の仮説検証的手続きにより語意を獲得していくとみなしている。また，一つの有力な潮流，「認知言語学」も，統辞法の生得性という点では生成文法と対立しながらも，意味の獲得という点では，やはり認知的要因や過程を重視しているようにみえる。アフォードンス理論のようなものも，同じ趣きをもつ。

以上のように，現代言語研究における意味ひいては語彙の獲得理論では認知論が主流をなしているといえよう。ここからくる半ば必然的な一つの帰結は，ピアジェ（J. Piaget）の構成主義に典型的にみられるように，獲得過程は，乳幼児に内在する何らかの基礎的機構と外的世界との相互交渉によって歩一歩と上昇を辿る学習過程として，また，内在的・個体的過程として理論化され易いということであろう。

むろん，このような認知主義の意義は否定し難い。しかし，一方的にそれを強調するばかりでは，偏向からくる見逃しも避けられないこととなる。本論文では，言語獲得において認知主義では見落されてきた要因である対人関係，特に母子関係に焦点を当てて，この問題を検討してみたい。

もちろん，この方向にも多少の構想は存在しなかったわけではない。精神分析学の現代的後継者の一つ，対象関係論学派は，最初期からの対人的環境，とりわけ母子関係を重視する。たとえば，この学派の先駆者の一人スピッツ（R. A. Spitz）は「生後1か年のあいだ，母親はすべての動作，すべての認識の媒介者としての役割をもつという人間的な仲間である」（古賀行義訳）と述べている（スピッツ，1964）。母親はすべての認識や行為の媒介者なのだから，当然，語彙の獲得に対しても決定的役割を演じているはずである（ここまで，「母子関係」とかいてきた。半ばは，対象関係論の慣用に従ったのと，半ばは本論文では，実際の母子関係を対象にしたためである。しかし，より概念的な正当さを求めるには，養育者 子ども関係とでもかくべきところであろう。ここでの「母」とは，真の養育者の象徴的表現と解して欲しい。以下も煩雑を恐れて，母子関係という表現に従う。なお，藤永他，1987を参照）。

スピッツは，「人間的な仲間」ということばを使っているが，これは，近年の発達心理学で慣用されるようになった「愛着（attachment）」という用語にほぼ等しいと考えられる。乳児研究の第一人者であるパウアー（T. G. R. Bower）は，愛着という概念について「一対の対人関係に特有なコミュ

ニケーション (pair-specific communication)」の成立とする独自の定義を下した (Bower, 1977)。この定義は、ふつうに考えられている愛情の発現といった内容とは一見異なるもののようにみえる。しかし、日本語でも「心の通い合う」という表現は広く用いられているが、通い合うとは、何らかの表現媒体を通じての相互交流を意味しているから、コミュニケーションといいかえても差し支えないことが分る。

ただし、ここで「特有の (特定の)」という限定が附されていることには注意が必要である。つまり、愛着の内容や過程をなすコミュニケーションとは、一般的かつ無限定なものではなく、あくまである特定の人間関係の対 (ペア) 同志にのみ通用するものである。ある母子間で心の通い合うコミュニケーションの様式は、他の母子間のそれと全く同じということはない。反対に、愛着は、親子という特別なペアのあいだでだけみられる現象ということでもない。パウアーは、ある一卵性双生児が相互に跡追いする例を示し、特有の目差し、姿勢、身振りとその同期性が認められることを写真により明らかにしている。親子間の愛着には、多くのペアに共通する要素があるのは自明だが、一卵性双生児の対となると、固有性ははるかに高くなるだろうことも肯かれよう。

ここから、パウアーは、次のようにいう。初期のコミュニケーションのパターンや機能は、上のように、限定的である反面強力でもあり、人見知りのような過程を導く。しかし、発達につれて次第に「ことば」というきわめて一般的なコミュニケーションの用具が備わることとなり、ペアに特有で限定的な身振り主体のコミュニケーションは、ことばにその席を譲り渡していく。こうして、2歳を過ぎて、かなりのコミュニケーション能力が備わるようになると人見知りも消えていくのだとする。

この理論はかなり説得力をもち、多くの現象を説明することができる。日本でも、これに触発されて優れた観察研究が現れているのは、その証左ともいえよう (鯨岡, 1997)。筆者も、共感を惜しむ者ではない。

しかし、Bower の愛着 = コミュニケーション理論が万全かといえれば、必ずしもそうはいえない。彼は、特異かつ限定的コミュニケーションが一般的相互交流を妨げるために人見知りが起こるとする。つまり、発語機能の発達で、人見知りを終らせることになる。それなら、社会的発語の始期はどの言語圏でもほぼ同一だから、人見知りの終る年代もほぼ一緒のはずである。しかし、日本のような文化圏では、人見知りは、パウアーの指摘する2歳よりも、はるかに前に消えていくという資料が一般的である。そこには、別の副次的要因が考えられねばならない。

もっと問題なのは、社会的発語が始まり、一般的な心の交流が可能になったからといって、限定的コミュニケーションにより支えられてきたはずの親子間の愛着は必ずしも弱体化はしない点である。この点は、スピッツが、母子一体化の期間を生後ほぼ一年間に限っていることが疑念を感じさせるのと同様といえるだろう。

いうまでもないことだが、母子間や双生児間の愛着は、原則的には、形を変えながらも生涯にわたってつづくものであろう。また、年齢が幼いほど、愛着の形態や強さも最初期のそれに近づくことも、日常的に観察される。「対特定 (pair-specific)」のコミュニケーション年代に形成された母子間の愛着は、始語期に入っても少しずつ形を変えながらも維持されるものと考えられよう。

トマセロ (M. Tomasello, 2000) による社会プラグマティックアプローチも、語意学習における有

力な学説として、近年登場してきた。この説は、社会的相互交渉過程が自ら語意習得のための社会文化的手掛りを与えるとするものであり、先天的制約よりも社会的要因を重視する点では、本論文の趣旨と変りがない。しかし、トマセロらは、社会相互交渉を一般的な幼児 成人間のものとし、またその過程で用いられる社会的スキルを理解する認知的技能を重視する点は、本論文とは立場を異にする。

その違いの一因は、トマセロらの実験対象が主に 2 歳以降の幼児であり、パウアーのいうように一般性をもつ社会的交渉過程の始期にあるのに対し、本研究の対象は、それより少し以前、ペア特有のコミュニケーション段階を過ぎようとしながら、まだ一般的相互交渉には至らない過渡期にあるところに求められよう。トマセロのいう社会プラグマティクスの基礎もやはり母子交渉のなかで築かれていくのであろう。そこには、母子という最も親密なペアにみられる独特の共鳴世界がなお姿を止め、次の段階へのスムーズな移行を可能にする媒介過程としての役割を果たす。始語期をこのような準備段階とみるなら、そこに始まる語彙獲得は、なお母子のペアに特有の緊密な相互交渉(コミュニケーション)によって支えられると仮定できよう。このような仮説のもとに、次のような学習実験を試みる。

## 方 法

### 実験・調査対象

東京西部の衛星都市居住の始語期の幼児をもつ母子 7 組。調査開始時の子どもの月齢は 18～24 月、平均は 22 月。性別は女兒 4、男児 3、長子で独り子 5、第 2 子 2。

### 調査方法

実験者は母子を家庭に訪問し、21 種類の動物・植物・魚などを画いた絵カードを母親にみせて、そのうちから子どもが発語したこともなく、また教えたこともないことを確認した 6 種類を選び、ランダムに 3 枚ずつに分けて、一方を母親、他方を実験者が子どもに教える(表 1・参照)。

母親には、ふだん絵本をよんであげるときの調子でこの 3 枚の絵カードをみせ、これは\_\_\_\_です、と教えて下さいと教示する。細かいやり方や順序などは、母親の自由に任せるが、無理強いせず 15～20 分のあいだに 3 つの名前をくり返し教えるよう、教示する。母親が教え終わった後、実験者が同様なやり方で別の 3 語を教える。この間、実験過程を VTR 撮影し、分析資料とする。

第 1 回の実験終了の 10～14 日後に再び訪問して、同様の仕方で絵カードの事物名称を教えるが、まず、これは何か憶えている、ときき、その返答により、確認または教え直すという方式をとる。VTR 撮影も同様。

第 2 回の終了後再び 10～14 日後に再度訪問し、被験児が 2 回にわたり教えられた事物語を、どの程度憶えているかを確認し、VTR 撮影も行った。

第 3 回訪問の際、第 1 回に留置きした日常の親子関係についての簡単な質問紙を点検、回収し、また、第 1 回～3 回の約 1 ヶ月間に、被験児に教えた 6 語につき、母親が別の機会に教えたり使ったことがあるか、また子どもが自発的に使うことがあったか否か、テレビ・動物園などで対象事物に触れる機会があったか、等について質問した。

表1. 各被験者に教えられる事物名称(教示単語)

	母 親			実 験 者		
	単語1	2	3	単語1	2	3
被験者 A:	おうむ	ばった	ゆり	つる	わし	さめ
B:	とんぼ	ばった	おうむ	しか	えび	ゆり
C:	しか	ゆり	おうむ	さめ	ばった	きく
D:	ばった	ゆり	おうむ	わし	さめ	つる
E:	さめ	おうむ	ゆり	ばら	さい	かも
F:	くらげ	わし	ばら	つる	きく	さめ
G:	さめ	さい	わし	ばった	ゆり	おうむ

## 結 果

教えられた事物名称が3回目のテストでどの程度記憶され定着していたかを判定して、次の三つのカテゴリーに分けた。第一は、絵カードの名称を正しく答えた場合（正答）、第二は答えることはできないが、教えた名称の絵カードと未知の絵カードを対にしたとき、その名前の絵カードを正しく指示できた場合（弁別）、第三は、何れもできなかった場合（未習）である。

獲得結果を表2に示す。一見して、母親教示と実験者教示では、大差のあることが分る（イエーツ修正  $\chi^2 = 18.46$ ,  $f = 2$ ,  $p < .0001$ ）。

母親教示と実験者教示では、ほとんど質的といってよいほどの差がある。しかし、それは集団としての結果であり、詳しく表2を点検すると、同じ母親集団内にも大きな個人差のあることがみてとれる。A, B, E, Fは、母親教示による語彙獲得が圧倒的に優れているのに対し、C, D, Gでは母親と第三者（実験者）間にそれほどの違いはなく、ここにも質的といってよいほどの差がある。

その差は何によるのかは、本論文の目的に照らして、きわめて重要な問題であり、その解明の手掛りとして、母子間及び実験者・子ども間の相互交渉過程の分析を試みた。VTR 資料にみられる母親と実験者の働きかけと子どもの反応を、久保田（1993）のカテゴリーを多少改変した次のカテゴリーに即して分類した。

表2. 被験者ごとの母および実験者からの教示単語の獲得

被験者	性別	時テ第 年ス三 齡ト回	母 親			実 験 者		
			単語1	2	3	単語1	2	3
A	F	1:10				×		×
B	M	2:0				×	×	×
C	M	2:1			×			×
D	F	2:0				×	×	×
E	F	2:0				×	×	
F	M	2:0				×	×	×
G	F	1:8						×

正答, 弁別, × 未習

母親・実験者の働きかけとして、「質問」「命名」「発言」「勧誘」「指示」「怒る(叱る)」「承認」「訂正」「聞き返す」「笑う、遊ぶ」を、また子どもの反応としては、「模倣」「指さし」「ずらす(課題や対象を他のことがらに切り変える)」「否認」「展開」「自発」「無反応」の各カテゴリーを用いた。

第 3 回は主としてテスト場面であるため、教示場面が主体である 1, 2 回の相互交渉場面のみを総計し、母子間と実験者・子ども間の総インタラクション数を示したものが表 3 である。

表3. 母子および実験者と子ども間の総インタラクション数

被験者	母親	実験者
A	69	55
B	68	42
C	169	41
D	51	42
E	96	30
F	102	88
G	60	38

表 3 をみると、先に述べた A・B・E・F と C・D・G のあいだには、目立った量的な差やパターンの差は見出しにくい。少し角度を変え、母親と実験者間のインタラクション総数の差と、また獲得スコア(正答 2 点, 弁別 1 点, 未習 0 点と換算しての獲得語彙の総得点)との関連をみたものが、表 4 である。ここでも、特に顕著な関連はみられない。

表4. 被験者ごとの単語獲得得点と母および実験者とのインタラクション総数の差と語彙獲得スコア

被験者	インタラクションの差	母親の教示	実験者の教示
A	14	6	1
B	26	6	0
C	128	2	2
D	9	3	0
E	66	5	1
F	14	5	0
G	22	3	2

結局、高い獲得度と低い獲得度との差は、インタラクション数の量的な差異や母子間と実験者・子ども間の相対的な差異などの量的な差に帰因するのではなく、質的な差にあるものと推定される。これをみるため獲得点数の高い A, B 2 組と、逆に低い C, D 2 組について、母子間のインタラクション・パターンを分類したものを、表 5 に示す。

表5. 高い獲得群(A, B)と低い獲得群(C, D)との母子間インタラクション・パターン

カテゴリーの流れ	被験者A		被験者B		被験者C		被験者D	
	頻度	率(%)	頻度	率(%)	頻度	率(%)	頻度	率(%)
1. 発 無	0	0.0	1	1.5	13	7.7	5	9.8
2. 発 否	0	0.0	0	0.0	0	0.0	19	11.2
3. 質 無	3	4.3	6	8.8	24	14.2	6	11.8
4. 質 指 承	8	11.6	0	0.0	4	2.4	1	2.0
5. 質 命 承	12	17.4	5	7.4	6	3.6	1	2.0
6. 質 命 訂	2	2.9	1	1.5	9	5.3	0	0.0
7. 質 命 聞	2	2.9	0	0.0	12	7.1	0	0.0
8. 質 命 模 訂	1	1.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0
9. 質 ず 遊	9	13.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
10. 質 命 遊 笑	2	2.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0
11. 質 命 遊	2	2.9	3	4.4	0	0.0	0	0.0
12. 命 模 承	0	0.0	13	19.1	4	2.4	7	13.7
13. 命 模	0	0.0	7	10.3	9	5.3	0	0.0
14. 命 模 遊	3	4.3	4	5.9	0	0.0	0	0.0
15. 命 模 模	0	0.0	8	11.8	0	0.0	0	0.0
16. 自 無	0	0.0	0	0.0	7	4.1	0	0.0
17. 自 聞	0	0.0	0	0.0	9	5.3	0	0.0
18. 自 否	0	0.0	0	0.0	2	1.2	0	0.0
19. 双方別行動	0	0.0	0	0.0	4	2.4	0	0.0

これを見ると、両群のあいだに顕著なインタラクション・パターンの差をみることができる。一見して知られるように、高獲得群(A, B)には、母親の質問に対して、命名 遊び 笑いといったよように一連のインタラクションが楽しい雰囲気のもとにスムーズに展開されていくことが想像されるパターンが多い。これに対し、低獲得群には、母親の発言や質問に対し、無視や無反応という発展性の乏しい断片的パターンが多い。また、双方別行動といった断絶もみられる。この様相の違いは、注目すべきものと思われる。

## 考 察

本研究は、対象数が少なく、性差その他の関連要因の検討もできていない。その点では、パイロットスタディの域に止まり、今後の検討を必要としよう。

しかし、問題の項に述べたように、緊密な養育者 子ども関係が、一般的な社会的相互作用や社会的技能の発展のための媒介過程をなし、その一環としての語彙や語意獲得のためにも有効な要因をなすという基本仮説にとっては、肯定的結果がえられたといえよう。対象関係論者の指摘するような母子間の共鳴世界は語彙獲得に際しても、いぜんとして重要な背景要因として働いているようである。

このことは、高獲得群と低獲得群間の母子間インタラクション・パターンの算的差異にみることが

できる。

逆に、低獲得群のある母親は、自分は働く必要は必ずしもないのだが、子どもの世話を好まないの  
で外に出ていると問わず語りに語ったという。また、同じ母親は、夫とのあいだで子どものことにつ  
いてほとんど話題にすることがなく、公園その他に遊びに連れていく回数も極端に少いことが質問紙  
の回答結果に示されていた。この資料も、別種の裏付けを与える。

もちろん、これを以て直ちに、緊密さを欠く母子関係が言語遅滞の引き金を引くなどと仮定するの  
は早計であろう。しかし、この関係が後の長い言語発達過程にどのような影響を及ぼすのかは肝要な  
問題であり、多様な関連要因の判別を可能にするよう、さらに大きな規模のもとに追求することが望  
まれる。

### 参考文献

Bower, T. G. R. (1997). *A primer of Infant Development*. San Francisco, ; W. H. Freeman.

藤永保. (2001). *ことばはどこで育つか*. 東京：大修館.

藤永保・斎賀久敬・春日喬・内田伸子. (1987). *人間発達と初期環境*. 東京：有斐閣.

今井邦彦(編). (1986). *チョムスキー小事典*. 東京：大修館.

久保田正人. (1993). *二歳半という年齢 認知, 社会性, ことばの発達*. 東京：新曜社.

鯨岡峻. (1997). *原初的コミュニケーションの諸相*. 京都：ミネルヴァ書房.

Markmann, E. (1992). Constraints on word learning : Speculations about their nature, origins,  
and word specificity. In M. Gunnar & M. Maratsos (Eds.) *Modularity and Constraints in  
Language and Cognition*. Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum.

スピッツ, 古賀行義(訳). (1964). *母子関係の成りたち*. 東京：同文書院.

Tomasello, M. (2000). 語意学習におけるプラグマティックス. 今井むつみ(編著). *心の生得性*. 第3  
章. 東京：共立出版.